

エッセイコンテストにみる 昭和のこころ



こころのエッセイコンテスト「第39回はがきキャンペーン」には今年も、小学生から90代まで幅広い世代の方からご応募いただきました。

メインテーマは「心から伝えたいありがとう」。近年は、コロナ禍で人との交流や外出する機会が減っていたことから、学校生活や日常を振り返り、改めて身近な人へ感謝を伝える作品が多かったのですが、アフターコロナとなった今年は帰省や旅行をする人が増加し、さまざまな場面や場所での心温まる体験が寄せられました。

また、過去の出来事を思い返し綴る作品も多く見受けられました。幼い頃、若い頃には気がつかず、年を重ねると見えてくる気づかいや思いやりがあるのかもしれない。

今年度最高賞に輝いた作品は、筆者が20歳の頃のエピソードです。嫁いだばかりで下宿の切り盛りを任された筆者。タイトルの「終い湯」とは、みんなが入り終わった後、一番最後に入るお風呂のことで「仕舞い湯」とも書きます。文中の「下宿」「タライ」「銭湯」「行水」の言葉とともに、昭和の暮らしが浮かび上がります。

青森出身のおばさんのもつ東北の方の温かい人情が、読む者の心を潤してくれる作品です。

大賞 受賞作品 紹介

しま 終い湯

静岡県 石井和子(80歳)

私が大所帯の家に嫁いだのは、昭和の後半、20歳になったばかり。怖い物知らずで、下宿人が数人居る家を任され、不慣れでただただ動き回り、汗ばんで不器用に働いていた。

庭先の借家に住んでいたおばさんは、我が家の事情を呑み込んでいる人で、義母の毛染めや下宿人の洗濯物の取り込みなどを手際よく手伝ってくれた。娘たちの子守りや様々な行事を、家族の一員の様にこままど動いてくれた。

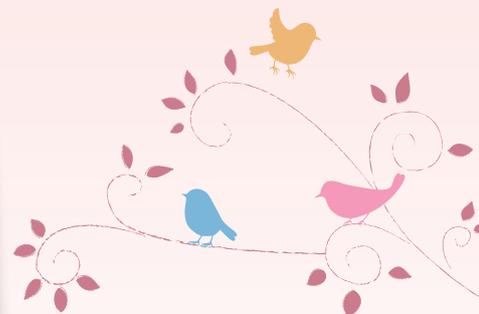
ある日、草取りをしている私に遠慮がちに、「終い湯でいいんだよ。お風呂を使わせてもらえないかな。週に一度でもいいからさ。お義母さんに頼んでみてくれないかね」と頼まれた。

おばさんの家にはお風呂がないので銭湯に行き、夏は夜にタライで行水をしているのを見かけた事があった。終い湯に入れたら、冬の寒い日に銭湯に行かないで済む。名案だ！早速義母に相談し、承諾がもらえ嬉しかった。

初めておばさんが終い湯に入った日、風呂の戸締りに行ってびっくり。窓ガラスはピカピカ、廊下もつやつやになっていた。

数年後、おばさんは故郷青森の下北に帰った。私も大人になって分かった事がある。あの時の「終い湯」の件は、おばさんが「入りたい」のではなく、不慣れで、戸惑いながら働いていた私を助けて、仕事の一つでも減らしてあげようとした親切心だったのだと。

ある日、「歳をとって淋しいよ。会いたいよ」と電話があった。あの時の「ありがとう」をたくさん言いたくて、お礼に娘たちも同行して大間を訪ねた。鮪をたっぷりご馳走になった夜は、「ありがとう」合戦で更けていった。



こころのエッセイコンテスト 「第39回はがきキャンペーン」

後援：日本郵便株式会社・読売新聞社
協賛：株式会社河出書房新社
応募総数：1,938編

※入賞・入選者はWEBサイトで発表いたします。また、入賞・入選作品は、来年2月中旬発行の「令和5年度作品集」に掲載します。

【審査員より】

懐かしい昭和のふれあい。60年たっても色あせない思い出が、その語り口から一層際立っています。